大阪

地域面3ページ

おおさか支局
〒530-8251（住所不要）
毎日新聞社会部おおさか支局
TEL06・6346・8443
FAX06・6346・8444

メールはat-osaka@mainichi.co.jp
読者の皆さんの取り上げてほしいテーマなど、お寄せください。

【購読お申し込み】
フリーダイヤル0120-468012

星の占い

マーク・矢崎

5日

★牡運★牡幸★双が★た★蟹な

問に思ったりもしました。なので、わたしはこの本を選びました。

クリストフの生まれたルワンダで、内戦が起こりました。クリストフは、けがをしたけれど、命に別じょうはできました。そして、この物語がはじまります。

クリストフのおなかのきずは、大人になるにつれて、うすれていくことでしょう。しかし、弟をなくしたり、らない幸せな時代に生まれてきました。食べ物に、こまったことも、ありません。日本の中で内戦が起こったりするなんてことは、考えられません。同じ国の人間同士が争うこと

詰すところた

にのこりました。人の前で自分が感じたおそろしい体験を話すことは、とても勇気がいることだったと思います。それなのに、クリストフはクラスのみん

一番心

は、いじめっ子に立ち向かっていきました。勇気を出したから一歩がふみ出せたのだと思います。

わたしはこの本を読んで、平和＝戦争のな

います。こまっている

お友達がいたら話をきいてあげたり、自分も助けてもらったりすればよいと思います。少しの勇気をもって行動すれば、何か

て。

（「お話きかせてクリストフ」ニキ・コーンウェル 訳者・渋谷弘子／文研出版）

を待っていると言し

「つどい場げんごろう」を開く

伊藤智子さん(45)＝八尾市

介護家族のよりどころに

祖母に感謝

なにわ人模様

近鉄八尾駅近くのマンションの一室で月1回の週末に、家族を介護している人たちが集まり、語り合う「つどい場げんごろう」を開いている。

21歳の時から約14年間、認知症だった祖母の長谷川とめをさんを自宅で介護し、2005年にみとった。とめをさんはほとんど寝たきりだったが、よく布団からはい出してきて転ぶため、目が離せなかった。母親と一緒に着替えや食事の介助のほか、昼夜問わずトイレの介助にも追われた。伊藤智子さん(45)は介護施設のパートを辞め、内職をしながらとめをさんの面倒を見た。

仕事や恋愛に忙しい同年代の友達には介護の話をするのもためらわれ、忙しさもあり、頻繁に連絡は取らなくなった。そんな時、とめをさんが週1回通うデイサービスで同じように家族を介護する人たちと出会った。話をするうちに連帯意識も生まれ、いつの間にか、介護仲間と会うことを心待ちにするようになっていた。

とめをさんをみとって4年がたった10年、テレビの特集で、介護家族が一軒家に集い、昼食を食べながら語りあう「つどい場さくらちゃん」（兵庫県西宮市）を知り、見学に行った。介護家族がざっくばらんに交流する様子は、かつて自分がデイサービスで仲間と語りあった時と似ていた。地元で土日だけなら自分にもできると考え、その年の7月に初めて「つどい場げんごろう」を開いた。

今では毎回、介護施設の職員なども含め計約10人が訪れ、お茶やお菓子を囲みながら交流する。爪の切り方、体位変換の仕方など介護方法を学ぶイベントも開いている。

人の気持ちを思いやることを教えてくれたとめをさんへの感謝の気持ちを込めて、入り口にはいつも、とめをさんの写真を飾る。「げんごろう」という名前も、とめをさんが帰りたがっていた滋賀県の実家の屋号からつけた。

参加した人からは、「話を聞いてもらえてよかった」「私だけじゃないと思えた」とメールなどで感想が届く。介護を通じた仲間にとって、「つどい場げんごろう」がいつでも帰れる心のよりどころになればと願っている。

【渡江千春】